

野外活動に参加する子ども達の親は何を期待するか？

小玉 功¹・小武海 博一²・松井 大介²・諫山 邦子³・加藤 敏之³・奥山 洸³
¹北海道生涯学習推進センター ²北海道立足寄少年自然の家 ³北海道教育大学釧路校

What do the parents of the children who participate in various outdoor activities expect ?

Takashi KODAMA¹, Hirokazu KOBUKAI², Daisuke MATUI², Kuniko ISAYAMA³,
Toshiyuki KATO³ and Kiyoshi OKUYAMA³

¹Hokkaido Lifelong Learning Promotion Center 006-0002, Japan

²Hokkaido Ashoro Children's Center, Ashoro 089-3734, Japan

³Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

Summary

The purpose of this study was to investigate to the parents the factors of the outdoor activities' attraction and the expectation for the children. The questionnaire containing 20 items was used to measure outdoor activities' attraction and the expectation for the children, by rating 3 stage scales.

The result were as follows:

- 1) With regard to the outdoor activities' attraction, non usual experience was strongly perceived.
- 2) With regard to the expectation for the children, parents strongly perceived acquiring positiveness and sociality while independence of mind and body was moderate and relation to nature was weakest.

1 問題

第15期中央教育審議会答申(平成8年7月)、第16期中央教育審議会答申(平成10年6月)、第4期生涯学習審議会答申(平成11年6月)⁽¹⁾では、子ども達に豊かで、多彩な生活体験、社会体験、自然体験の機会を、意図的・計画的に提供していくことの重要性を指摘している。

文部科学省⁽²⁾は、体験的活動を推進することにより、青少年の豊かな人間性を育む「思いやりの心」「社会性」「自ら考え行動できる力」などを養っていくことが重要であると解説し、星野⁽³⁾は、青少年健全育成フォーラムでの各国からのパネリストの意見を集約し、青少年の社会性、自分とちがう他者を尊重すること、意欲、問題解決能力、精神力、体力、地域・自然理解は、体験を通じることで根付いていくものであるとまとめている。

前述の答申を受け、「全国子どもプラン」「新全国子どもプラン」として、国は環境整備の推進を図っており、その一環として青少年教育施設では、「豊かな自然の中での

集団生活や自然体験活動を行う機会と場を提供する」施策のもとでの取り組みが求められてきている。⁽¹⁾

北海道立足寄少年自然の家(以下ネイバル足寄)では、主催する事業の与える児童生徒への効果を実証的に示すことに努めてきた。われわれはそのために独自に工夫したいくつかの評価票を用いて児童生徒の意識や行動の変化を測定しているが、これらはいずれにせよ野外活動の開始日から最終日までの範囲に限られた期間での変化しか見ることができない。野外活動に参加したことによって、学校や家庭における日常生活の中でどのような変化が生じたのか?このことについての情報が重要である。そこで2002年度からは、事業が終了した後に児童生徒の変化を16項目にわたって保護者に訊き、効果の指標の一つとすることを試みている⁽³⁾。同じ質問紙は北海道教育委員会主催の不登校生徒を対象とした2週間の長期キャンプでも用いられている⁽⁴⁾。

2003年度、われわれは保護者に求める情報を、事後の児童生徒の変化についてのみでなく、事前に期待する児童

生徒の変化にまで広げることにした。実際、事後の変化についての評価を見ると、それは事前の児童生徒の状態を保護者がどのように把握しているか、あるいはそれにもとづいてどのような変化を期待しているかということと無関係には議論できない。例えば「気持ちが穏やかになった」という項目は一つの事業で16項目中2番目に大きな変化を示しながら、別の事業では14番目に位置づけられている³⁾。現実には同じ変化が生じながら、前者の事前の状態が、いわばいっそう「荒れていた」かもしれないのである。もちろん、保護者が事前に何を期待しているかを知ることができるといえるかというのを考える実践的な課題と直接結びついていることでもある。

本稿では2003年度、ネイバル足寄、および北海道教育委員会の主催する9つの野外活動に参加した児童生徒の保護者がとらえた野外活動の魅力、あるいはそれらに対する期待について報告する。

2 方法

2.1 調査票 これまでの調査で得られた保護者の自由記述などを参考にしながら、ネイバル足寄で行われる野外活動の魅力や野外活動に参加した児童生徒への期待を表現する短文31個を作成した。その後、意味の類似する文章を削除し、表現の一部を変えるなどして、最終的に20項目をもって調査票の内容とした(資料参照)。これらは野外活動の魅力を表現する4項目(資料: Iの第1~4項)と、児童生徒への期待を表現する16項目(資料: IIの第1~16項)から構成された。期待を表現する16項目は、自己決定にかかわると思われる4項目(資料: IIの第1、2、4、9項)、対人関係にかかわると思われる4項目(同じく第7、8、10、15項)、心身の保持にかかわると思われる4項目(同じく第5、12、13、14項)、自然理解にかかわると思われる4項目(同じく第3、6、11、16項)からなっていた。

事業の魅力を表現する4項目については、これらをまとめて置いた上で、「今回の企画の何が魅力ですか。魅力を感じる項目には○、特に魅力を感じる項目には◎を[]の中に記入してください。いくつ記入してもよろしいです」という教示を付した。児童生徒への期待を表現する16項目もまとめて置いた上で、「今回の企画でお子さんに何を期待しますか。期待している項目には○、特に期待している項目には◎を[]の中に記入してください。いくつ記入してもよろしいです」という教示を付した。

2.2 児童生徒の参加した活動 ネイバル足寄が2003年度に主催した17個の事業から、指導者育成を主な内容としたもの、および日帰りで行われたもの9事業を除いて8

事業とし、別に北海道教育委員会主催の1事業を加え、計9事業を調査対象の事業とした(表1)。

これらは農業体験を主な内容とし、小・中学生と家族を対象とした1泊2日の「楽遊隊春」および「楽遊隊秋」、野外炊飯や雪遊びなどを主な内容とし、障害のある子どもを含む小・中学生を対象とした1泊2日の「探険隊I」および「探険隊II」、長距離サイクリングやスキートレッキングなどの冒険プログラムを内容として含み、小・中学生を対象とした6泊7日の「夏冒険」および「冬冒険」、長距離トレッキングなどの冒険プログラムを内容として含み、不登校の小・中学生と家族や教職員を対象とした4泊5日の「のんびり」、星空観察や釣りなどを内容とし、小・中学生と家族を対象とした1泊2日の「冬ひろば」、および長距離トレッキングやソロキャンプなどの冒険プログラムを内容として含み、不登校の小・中学生を対象とした13泊14日というごく長期にわたる「フロンティア」(この事業のみが北海道教育委員会主催)という、内容、対象、期間などのそれぞれについて多岐にわたるものであった。

2.3 調査の手続き それぞれの事業を実施するたびに、参加を希望する児童生徒の保護者全員に対して、調査票を事前に郵送した。調査票は、原則として第1日目の当日、申し込み手続きの一環として回収した。

2.4 調査期間 2003年5月17日~18日に行われた「楽遊隊春」から、2004年2月21日~22日に行われた「冬ひろば」にいたるまでのおよそ9ヶ月が調査期間であった。

2.5 調査対象 9個の事業に参加した児童生徒の累計は315名であった。このうち296名の児童生徒の保護者から有効な調査票が回収された。「フロンティア」での回収率が72.0%であった以外は、他の全ての事業で回収率は90%以上であり、全体としては94.0%となった(表1)。

3 結果

3.1 処理の方法 20項目のいずれについても、◎(特に魅力を感じる、または特に期待している)を2点、○(魅力を感じる、または期待している)を1点、無記入を0点とした。これらについての単純集計を表2.1、および表2.2に示す。

296名分の資料の中には、複数の活動に参加した者(以下リピーター)、延べ89名分が含まれていた。全体の結果を正確に分析するためには、リピーターについての資料を除いた上で2要因分散分析を適用するなどの手続きが考えられる。しかしそうすると、およそ3分の1の資料が失われることになる。そこで今回は全体の結果についての統計的な検定は行わず、それぞれの活動ごとに1要因分散分析を行うにとどめた。

表 1 事業の概略と調査対象者

事業名(略称)	開催期日	参加対象	主な内容	参加した児童生徒	調査対象者
あつまれ! 自然楽遊隊“春” (楽遊隊春)	2003年 5月17日(土) ～18日(日) (1泊2日)	小・中学生と その家族	1日:ジャガイモ、トウキビなどを植える農業体験、 夜、保護者は子育て談話/2日:山菜取りと山菜の調理。	50	45
ネイバルあしよろ 探険隊Ⅰ (探険隊Ⅰ)	6月21日(土) ～22日(日) (1泊2日)	障害のある子どもを含む小・中学生	1日:テント設置とテント泊、/2日:野外炊飯、希望者は熱気球搭乗体験。	40	40
のんびりのびのび 自然体験 (のんびり)	7月2日(木) ～6日(日) (4泊5日)	不登校の小・中学生とその家族及び教職員	1日:野外炊飯、/2日:リハーサルハイク(11kmのトレッキング)/3日:オンネトー湖よりネイバル足寄までの45kmのうち、18～27kmのトレッキング。夜は地域の集落センターなどで宿泊、/4日:残り18～27kmのトレッキング、/5日:熱気球搭乗。	26	25
Let's try 夏冒険 (夏冒険)	8月3日(日) ～9日(土) (6泊7日)	小・中学生	1日:野外炊飯、/2日:雄阿寒岳縦走登山、テント泊、/3日:長距離サイクリングの準備(地図の読み方・ルートの研究など)、テント泊、/4日:長距離サイクリング。農家の納屋に宿泊、/5日:長距離サイクリング。いかだによる利尻川の川下り、/6日:熱気球搭乗練習/熱気球搭乗。	36	36
北の フロンティア (フロンティア)	8月4日(月) ～17日(日) (13泊14日)	不登校、ひきこもりなど心に悩みを持つ小・中学生	1日～3日:仲間づくりゲーム、昭和南山へのバス遠足、/4日～6日:テント泊、洞爺湖一周(37km)トレッキング、カヌー漕艇、/7日～8日:海遊び、カッター漕艇、/9日:簡易テントでのソロキャンプ/10日～14日:農業体験、料理コンテスト、家族も参加するキャンプファイヤー。	25	18
あつまれ! 自然楽遊隊“秋” (楽遊隊秋)	9月6日(土) ～7日(日) (1泊2日)	小・中学生とその家族	1日:春に植えたジャガイモ・トウキビなどを収穫する農業体験、/夜、保護者は子育て談話/2日:収穫した野菜を使う野外炊飯。	43	41
Let's try 冬冒険 (冬冒険)	2004年 1月7日(水) ～13日(火) (6泊7日)	小・中学生	1日:熱気球搭乗、アイスキャンデル作り、/2日:阿寒湖水上ワカサギ釣り、/3日:歩くスキーの準備(企画やコースの下見など)/4日:オンネトー湖上横断歩くスキートレッキング、/5日:耐寒テント泊、/6日:お別れ会の準備、お別れ会、/7日:雪中レクリエーション。	32	31
ネイバルあしよろ 探険隊Ⅱ (探険隊Ⅱ)	2月7日(土) ～8日(日) (1泊2日)	障害のある子どもを含む小・中学生	1日:熱気球搭乗またはバードコール製作、/2日:雪遊び(スノーラフティング、そり滑り、イグルー作りなど)。	30	29
ネイバルあしよろ 冬ひろば (冬ひろば)	2月21日(土) ～22日(日) (1泊2日)	小・中学生とその家族	1日:銀河の森天文台で星空観察、/2日:阿寒湖水上ワカサギ釣り、ワカサギの調理。	33	31
				累計	296
				回収率	94.0%

注:「北のフロンティア」は北海道教育委員会主催事業で洞爺湖周辺を会場とした。それ以外は全て道立足寄少年自然の家(ネイバル足寄)主催事業でネイバル足寄およびその周辺を会場とした。

表 2.1 事業の魅力(単純集計)

順位	項目	平均(標準偏差)
①	4 学校ではできないことを多く体験させることができる	1.60 (0.57)
②	2 保護者が連れて行けないところに連れて行ってもらえる	0.87 (0.81)
③	3 金額が安い	0.58 (0.67)
④	1 子どもがいない間にいろいろなことできる	0.14 (0.42)

注:「特に魅力がある」を2点、「魅力がある」を1点、無記入を0点とした。

表 2.2 児童生徒への期待 (単純集計)

順位	項目	平均 (標準偏差)
		n=296
①	7 いろいろな人と協力して物事に 取り組めるようになってほしい	1.35 (0.67)
②	15 いろいろな大人や子どもたち と多く関わってほしい	1.21 (0.71)
③	2 がまん強く、最後まで物事に 取り組むようになってほしい	1.05 (0.79)
④	9 自分から物事に取り組み、行 動できるようになってほしい	1.03 (0.75)
⑤	10 自分の気持ちをはっきりと伝 えられるようになってほしい	0.98 (0.82)
⑥	1 自分で判断できる力を身につ けてほしい	0.91 (0.78)
⑦	8 困っている人がいたら助けて あげられる人になってほしい	0.85 (0.77)
⑧	4 身の回りのことを自分ででき るようになってほしい	0.71 (0.77)
⑨	3 自然の美しさに感動する心を 持ってほしい	0.65 (0.72)
⑩	13 一人でも生活できる力を身に つけてほしい	0.53 (0.69)
⑪	6 自然を理解する力を身につけ てほしい	0.51 (0.65)
⑫	5 体力をつけてほしい	0.46 (0.66)
⑬	16 自然や環境を守る実践力を身 につけてほしい	0.41 (0.61)
⑭	14 野外活動の技術を身につけて ほしい	0.41 (0.61)
⑮	11 自然保護や環境問題に関心を 持ってほしい	0.39 (0.55)
⑯	12 健康管理などを自分でできる ようになってほしい	0.38 (0.57)

注: 「特に期待している」を2点、「期待している」を1点、無記入を0点とした。

また子どもへの期待を表現する16項目については、因子分析により要約を試みることにした。

3.2 子どもへの期待についての因子分析 主因子法を用い、バリマックス回転を行うことにより、4因子を抽出した(表3)。第1因子は、当初自然理解にかかわると想定した4項目(第3、6、11、16項)全てと、心身の保持にかかわると想定した中の1項目(第14項)の計5項目に対する負荷が高かった。第14項は「野外活動の技術」というキーワードを含んでおり、結局5項目全てが自然とのかかわりを表現するものであった。そこで第1因子を「自然とのかかわり」の因子と名づけ、これらの得点の平均を「自然とのかかわり」得点とした。アルファ係数は0.81であった。

第2因子は、当初心身の保持にかかわると想定した3項目(第5、12、13項)と、自己決定にかかわると想定した2項目(第1、4項)の計5項目に対する負荷が高かった。第5項、第12項は健康な身体確立、第4項、第13項は身の自立、第1項は精神的自立を表現していると解釈された。そこで第2因子を「心身の自立」の因子と名づけ、これらの得点の平均を「心身の自立」得点とした。アルファ係数は0.72であった。

第3因子は、当初対人関係にかかわると想定した4項目(第7、8、10、15項)全てと、自己決定の表現とかわると想定した2項目(第2、9項)に対して負荷が高かった。そこで第3因子を「積極性と社会性」の因子と名づけ、これらの得点の平均を「積極性と社会性」得点とした。アルファ係数は0.71であった。

表 3 児童生徒への期待についての因子分析 (主因子法・バリマックス回転)

項目番号	項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子 自然とのかかわり ($\alpha=0.81$)					
16	自然や環境を守る実践力を身につけてほしい	0.729	0.299	0.035	0.621
6	自然を理解する力を身につけてほしい	0.615	0.239	0.269	0.507
11	自然保護や環境問題に関心を持ってほしい	0.605	0.275	0.250	0.503
3	自然の美しさに感動する心を持ってほしい	0.577	0.125	0.320	0.451
14	野外活動の技術を身につけてほしい	0.511	0.452	0.064	0.469
第2因子 心身の自立 ($\alpha=0.72$)					
13	一人でも生活できる力を身につけてほしい	0.279	0.612	0.074	0.458
12	健康管理などを自分でできるようになってほしい	0.351	0.574	0.213	0.498
5	体力をつけてほしい	0.233	0.554	0.220	0.409
4	身の回りのことを自分でできるようになってほしい	0.175	0.399	0.218	0.237
1	自分で判断できる力を身につけてほしい	0.109	0.398	0.389	0.322
第3因子 積極性と社会性 ($\alpha=0.71$)					
7	いろいろな人と協力して物事に取り組めるようになってほしい	0.055	0.086	0.606	0.378
8	困っている人がいたら助けてあげられる人になってほしい	0.354	0.115	0.559	0.451
9	自分から物事に取り組み、行動できるようになってほしい	0.104	0.274	0.466	0.303
15	いろいろな大人や子どもたちと多く関わってほしい	0.199	0.055	0.444	0.239
10	自分の気持ちをはっきりと伝えられるようになってほしい	0.146	0.267	0.435	0.281
2	がまん強く、最後まで物事に取り組むようになってほしい	0.071	0.379	0.415	0.322
寄与率(%)		30.8	5.8	3.7	
累積寄与率(%)		30.8	36.6	40.3	

3.3 事業の魅力 (項目の比較) 9 個の事業ごとに事業の魅力についての 4 項目の得点の平均値を比較した (表 4.1)。「探険隊 I」、「夏冒険」、「楽遊隊秋」、「冬冒険」、「探険隊 II」では、「学校ではできないことを多く体験させることができる (以下、「学校ではできない経験」)」、「保護者が連れて行けないところに連れて行ってもらえる (以下、「保護者ではできない経験」)」、「金額が安い」、「子どもがいない間にいろいろなことができる (以下、「用事をすませる」)の順に高い値であった。「楽遊隊春」、「フロンティア」、「冬ひろば」では、「学校ではできない経験」が最高、「用事をすませる」が最低で、その中間に「保護者ではできない経験」と「金額が安い」が位置した。「のんびり」では、「学校ではできない経験」が最高、「保護者ではできない経験」がそれに続いた。

「学校ではできない経験」は 9 個の事業全てで常に最高の値を示し、「保護者ではできない経験」は 6 個の事業で第 2 位の位置を占め、「金額が安い」は常に「保護者ではできない経験」を超えることがなく、「用事をすませる」

は 9 個中 8 個の事業で最低の値を示した。

全体の傾向は、「学校ではできない経験」、「保護者ではできない経験」、「金額が安い」、「用事をすませる」の順に高いものと思われた (表 2.1)。

3.4 子どもへの期待 (因子の比較) 9 個の事業ごとに 3 個の因子についての得点の平均値を比較した (表 4.2)。

「楽遊隊春」、「のんびり」、「フロンティア」、「冬冒険」、「探険隊 II」では、「積極性と社会性」、「心身の自立」、「自然とのかかわり」の順に高い値であった。「探険隊 I」、「夏冒険」、「楽遊隊秋」、「冬ひろば」では、「積極性と社会性」の値は最も高かった。その下にある「心身の自立」と「自然とのかかわり」の間には差がなかった。

9 個の事業の全てで「積極性と社会性」が最高の値を示し、4 個の事業で「心身の自立」が第 2 位、「自然とのかかわり」が最低の値であった。

全体の傾向は、「積極性と社会性」、「心身の自立」、「自然とのかかわり」の順に高いものと思われた (表 5)。

表 4.1 事業の魅力 (項目の比較)

事業略称	(a)	(b)	(c)	(d)	n	df	F	多重比較 (LSD法)
	子どもがいない間にいろいろなことができる	保護者が連れて行けないところに連れて行ってもらえる	金額が安い	学校ではできないことを多く体験させることができる				
楽遊隊春	0.02(0.15)	0.84(0.76)	0.67(0.67)	1.69(0.46)	45	3/132	74.5**	d>bca, bc>a
探険隊 I	0.15(0.42)	0.90(0.73)	0.63(0.70)	1.40(0.54)	40	3/117	29.7**	d>bca, b>ca, c>a
のんびり	0.12(0.32)	0.80(0.69)	0.40(0.57)	1.72(0.45)	25	3/72	40.9**	d>bca, b>ca
夏冒険	0.11(0.31)	1.17(0.87)	0.67(0.71)	1.78(0.42)	36	3/105	56.2**	d>bca, b>ca, c>a
フロンティア	0.00(0.00)	0.67(0.67)	0.78(0.63)	1.33(0.67)	18	3/51	14.6**	d>cba, cb>a
楽遊隊秋	0.02(0.15)	0.76(0.79)	0.49(0.63)	1.76(0.43)	41	3/120	65.7**	d>bca, b>ca, b>a
冬冒険	0.00(0.00)	1.32(0.78)	0.55(0.71)	1.84(0.45)	31	3/90	61.6**	d>bca, b>ca, c>a
探険隊 II	0.07(0.25)	1.00(0.79)	0.62(0.67)	1.45(0.72)	29	3/84	29.8**	d>bca, b>ca, c>a
冬ひろば	0.00(0.00)	0.71(0.81)	0.55(0.66)	1.61(0.55)	31	3/90	39.7**	d>bca, bc>a

注 1: **p<0.01

注 2: 多重比較の欄で、例えば「bc>a」は「b>a, c>a」を表す。「b>ca」は「b>c, b>a」を表す。

表 4.2 児童生徒への期待 (因子得点の比較)

事業略称	(a)	(b)	(c)	n	df	F	多重比較 (LSD法)
	第 1 因子 自然とのかかわり	第 2 因子 心身の自立	第 3 因子 積極性と社会性				
楽遊隊春	0.53(0.49)	0.68(0.49)	1.04(0.51)	45	2/88	41.4**	c>ba, b>a
探険隊 I	0.48(0.48)	0.56(0.52)	1.13(0.45)	40	2/78	34.3**	c>ba
のんびり	0.35(0.39)	0.56(0.48)	1.07(0.29)	25	2/48	34.2**	c>ba, b>a
夏冒険	0.52(0.59)	0.60(0.56)	1.07(0.47)	36	2/70	41.5**	c>ba
フロンティア	0.27(0.38)	0.71(0.37)	1.12(0.47)	18	2/34	48.0**	c>ba, b>a
楽遊隊秋	0.51(0.41)	0.57(0.50)	1.09(0.54)	41	2/80	50.1**	c>ba,
冬冒険	0.39(0.37)	0.61(0.41)	1.09(0.49)	31	2/60	34.7**	c>ba, b>a
探険隊 II	0.46(0.51)	0.63(0.46)	1.02(0.45)	29	2/56	24.8**	c>ba, b>a
冬ひろば	0.58(0.50)	0.47(0.35)	1.09(0.53)	31	2/60	22.9**	c>ba

注 1: **p<0.01

注 2: 多重比較の欄で、「c>ba」は「c>b, c>a」を表す。

表5 児童生徒への期待 (因子得点の単純集計)

順位	因子	n=296	
		平均	(標準偏差)
①	第3因子 積極性と社会性	1.08	(0.48)
②	第2因子 心身の自立	0.60	(0.48)
③	第1因子 自然とのかかわり	0.47	(0.48)

4 考察

事業の魅力を訊いた結果は、「学校ではできない経験」、「保護者ではできない経験」の値が高かった。保護者のとらえたネイバル足寄の事業の主要な魅力は、学校や家庭にはない非日常的な世界がそこに準備されている点にある。児童生徒は一時的にそこへ移り住み、普通ではありえない経験を通じて、普通ではできない成長を遂げるはずなのである。

ところで、保護者の意識するこうした非日常への移行ということは、人間の世界から自然の世界への移行というよりは、日常の人間関係から非日常の人間関係への移行という意味が強いのではないだろうか。なぜなら、児童生徒の成長への期待を見ると、「積極性と社会性」、「心身の自立」、「自然とのかかわり」の順に高く、人間関係が常に優位を占めているからである。「自然」は主に「人間関係」を作り変える契機として位置づけられているように見えるのである。

野外教育における課題や目的をめぐる議論を見ると、たとえば神田⁽⁵⁾は、一般的に親が子どもによせる基本的課題—期待として、「自立すること」を挙げている。佐々木⁽⁶⁾は、野外活動での指導者に、待つこと、褒めることなどカウンセリング機能を重視し、目に見えない子どもの変化をいかに「自立」につなげていくかを求めたいとしている。山本⁽⁷⁾は、野外活動は「自立心」にかかわる人間的側面を磨くことに適しているのではないかと述べ、さらに、勤務先の保護者会での母親達は、望ましい子ども像として、「思いやりがある、やさしい」を圧倒的に支持していたことと現実の社会構造の変容から考えると、これからの野外活動には、体力やからだの強さといったたくましさから、「しなやかさや柔軟性」といった心の強さを兼ね備えたたくましさの教育への転換が要求されてくるとしている。九里⁽⁸⁾は、自然の中に親子または友人と入ることは、遠回りで効果がわかりにくい、「子どもが社会性を持つ大きなきっかけ」になりえると述べている。

しかし一方松下⁽⁹⁾は野外教育における少年自然の家の役割を論じる中で、少年自然の家が設置された契機のひとつは、1960～1970年代に3本足や4本足のニワトリを描く多くの大学生や麦の穂を青虫とまちがえる幼稚園児のいることへの人々の危機感にあったというエピソードを

紹介している。すなわち自然についての認識自体が課題であったのである。また、降旗⁽¹⁰⁾は、これからの子ども達には、「自然との関わり」の中で、自然を含む地域社会の一員であるという明確な意識と、自然や社会に責任を持っている担い手であるという気づきが求められているとしている。あるいは岡村ら⁽¹¹⁾は、野外教育の内容を冒険教育と環境教育に大別した上で、両者があいまって自然に対する認知的態度と感情的態度の向上に寄与することを論じている。野外教育における自然についての認識ということの位置づけは、当然ながら常に大きな意味を持っている。

こうした経緯を踏まえると、本稿で見た保護者の意識は、人格変容の契機としての自然というおおかたの議論と照応している。けれども自然や環境についての児童生徒の認識を深めるといふ課題に取り組むときには、われわれが意識しなければならぬ重要な条件の一つであると思われる。

文献

- (1) 内閣府編 (2004) 平成15年版 青少年白書 : 64-65
- (2) 文部科学省 (2004) 解説 スポーツ・青少年 (特集 文教科学技術施策の進展) 文部科学時報 No.1537 : 60-61
- (3) 小玉功・奥山洸・加藤敏之・諫山邦子 (2003) 不登校児童生徒の心理的・行動的変容に寄与した冒険キャンプのとりくみ, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 No.3 : 109-119.
- (4) 小玉功・諫山邦子・加藤敏之・奥山洸 (2002) 不登校生徒を対象とした2週間の野外教育プログラム, 一釧路論集—, 北海道教育大学釧路校研究紀要 No.34 : 1-10
- (5) 神田道子 (1995) 親の期待と子育て, 児童心理 Vol. 49 No. 2 : 105
- (6) 佐々木生樹 (1995) 野外活動が育む自立心, 児童心理 Vol. 49 No. 2 : 144-147
- (7) 山本悟 (1999) 野外活動で自律・たくましさを育てる, 指導と評価 No.538 : 29-32
- (8) 九里徳泰 (2004) 社会性を育てる野外活動, 児童心理 Vol. 58 No. 2:37-42
- (9) 松下俱子 (1999) 野外教育と少年自然の家について—現場の状況から考える—, 野外教育研究 2-2:1-10
- (10) 降旗信一 (2003) 自然体験活動と子どもの成長, 子ども白書, 草土文化 : 226-227
- (11) 岡村泰斗・飯田稔・橋直隆・関智子 (2000) キャンプにおける環境教育・冒険教育プログラムが参加者の自然に対する態度に及ぼす効果の比較研究, 野外教育研究 3-2 : 1-12

[資料]

調査票

お名前 _____ お子さんのお名前 _____

I. 今回の企画の何が魅力ですか。魅力を感じる項目には○、特に魅力を感じる項目には◎を [] の中に記入してください。いくつ記入してもよろしいです。

1. 子どもがいない間にいろいろなことができる…………… []
2. 保護者が連れて行けないところに連れて行ってもらえる…………… []
3. 金額が安い…………… []
4. 学校ではできないことを多く体験させることができる…………… []

II. 今回の企画でお子さんに何を期待しますか。期待している項目には○、特に期待している項目には◎を [] の中に記入してください。いくつ記入してもよろしいです。

1. 自分で判断できる力を身につけてほしい…………… []
2. がまん強く、最後まで物事に取り組むようになってほしい…………… []
3. 自然の美しさに感動する心を持ってほしい…………… []
4. 身の回りのことを自分でできるようになってほしい…………… []
5. 体力をつけてほしい…………… []
6. 自然を理解する力を身につけてほしい…………… []
7. いろいろな人と協力して物事に取り組めるようになってほしい…………… []
8. 困っている人がいたら助けてあげられる人になってほしい…………… []
9. 自分から物事に取り組み、行動できるようになってほしい…………… []
10. 自分の気持ちをはっきりと伝えられるようになってほしい…………… []
11. 自然保護や環境問題に関心を持ってほしい…………… []
12. 健康管理などを自分でできるようになってほしい…………… []
13. 一人でも生活できる力を身につけてほしい…………… []
14. 野外活動の技術を身につけてほしい…………… []
15. いろいろな大人や子どもたちと多く関わってほしい…………… []
16. 自然や環境を守る実践力を身につけてほしい…………… []